

『程氏家塾読書分年日程』 訳注 (二)

松野 敏之

本稿は、朱子学研究会の読書会で扱った程端礼『程氏家塾読書分年日程』の訳注を試みるもので、本誌前号からの連載である。読書会の参加者は、以下の通りであり、本稿は担当者（氏名の上に「※」を表記）の草稿を元に作成している。

片岡龍（東北大学文学研究科講師）・清水則夫（早稲田大学大学院博士課程）・宮下和大（早稲田大学大学院博士課程）・北澤絃一（早稲田大学大学院博士課程）・※阿部光麿（早稲田大学第一文学部助手）・大場一央（早稲田大学大学院博士課程）・※小池直（早稲田大学大学院修士課程）・上村新治（早稲田大学大学院修士課程）・田村有見恵（早稲田大学大学院修士課程）・中嶋諒（早稲田大学大学院修士課程）・原信太郎アレシヤンドレ（早稲田大学大学院修士課程）・※松野敏之（早稲田大学大学院博士課程）

【凡例】

・底本には常熟瞿氏鐵琴銅劍樓藏元刊本（四部叢刊所収）を用い、清刊本（叢書集成本・四庫全書本）との校異を示した。但し、煩を避けるため、異体字・通仮字・同義語の類の異同は割愛した。

・解釈には、『程氏家塾読書分季日程』（昌平叢書所収）および姜漢椿校注『程氏家塾読書分年日程』（黄山書社出版、一九九二年四月）を参照した。

・訳注は、原文・校異・注釈・通釈の順で並ぶ。

・原文・訳文中の「」を附した部分は、底本では割注に相当する。

・訳文中で（ ）を附した部分は、訳者の補注である。

【『程氏家塾読書分年日程』綱領（底本九丁表）】

朱子記經史（レ）闕有曰、古之學者無他、明德新民、求各止於至善而已。夫其所明之德、所止之善、豈有待於外求哉。識其在我、而敬以存之、其亦可矣。其所以必曰讀書云者、則以天地陰陽事物之理、修身事親、齊家及國、以至於平治天下之道、與凡聖賢之言行、古今之得失、禮樂之名數、而至於食貨源流、兵刑法制、亦莫非吾度内、有不可得而精粗者。若非攷諸載籍之文、沉潛參伍、以求其故、則亦無以明夫明德體用之全、而止其至善精微之極。然自聖學不傳、世之爲士者、不知學之有本、而惟書之讀、則其所以求於書、不越乎記誦詁文詞之間、以釣名

干祿而已。是以天下之書、愈多而理愈昧。學者之事、愈勤而心愈放。詞章愈麗、議論愈高、而其德業事功之實、愈無以逮乎古人。然非書之罪也。讀者不知學之有本、而無以爲之地也。使二三子者、知夫爲學之本、有無待於外求者、而因以致其操存持守之力、使吾方寸之間、清明純粹、眞有以爲讀書之地、而後宏其規、密其度、循其先後本末之序、以大玩乎闡中之藏、則夫天下之理、必有以盡其纖悉而一以貫之。異時所以措諸事者、亦將有本而無窮矣。

〔校異〕

a 新：叢書集成本、「親」に作る。 b 而：叢書集成本・四庫全書本、「下」に作る。

〔注釈〕

(1) 朱子記經史闡：『朱文公文集』卷八〇に「福州州学經史闡記」として収める。慶元元年（一一九五・朱熹六六歳）九月に著す。

經史闡はここでは福州州学にあるものを指す。『大明一統志』卷七四・福州府・宮室に「經史闡、在府学、宋教授常濬孫建、朱熹作記」とある。

〔通釈〕

朱子は「經史闡」に記を著して次のようにいう。古の学問とは他でもない、明德・新民それぞれが至善に止まることを求めるだけである。その明らかになすべき徳、止まるべき善は、どうして外に求める必要があるのか。それらが自己にあることを知り、敬によつて保ち続けられ、それでよいのである。それなのに、必ず「讀書」と言う理由は、天地陰陽・事物の理、身を修めて親につかえ、家を齊えてととの国に治世を及ぼし、天下を平らかに

治める道と、聖賢の言行、古今の得失、礼楽の名数から経済の源流や軍事・刑法の制度まで、以上すべてはわが分内のことではあるが、精・粗の違いがどうしても出てきてしまう。もしこれ等のことを典籍に記された文から考え、熟慮考究して、その原因をもとめなければ、明德体用の全体を明らかにして、至善精微の極みに止まることはできない。しかしながら、聖学が伝わらなくなつて以来、世の士人達は学に根本のあることを知らずにただ書を読むだけであり、彼等が書に求めているものは、記誦・訓詁・文詞の類を越えることはなく、名声や俸禄を求めるだけに過ぎない。それゆえ、天下に書が多ければ多いほど理は味み、学ぶ者が学業に勤めれば勤めるほど心は浮つき、詞章が麗しければ麗しいほど、議論が高ければ高いほど、その德行・功績の内実はいよいよ古人に及ばなくなる。しかし、それは書の罪ではない。読む者が学に根本があることを知らず、その根本を下地とすることがないからなのである。

もしお前たちが、学をおさめる根本は外に求める必要のないものであると理解し、それによつて操存・持守の修養を行い、さらに自身の心を清明純粹にして、真に読書の下地とさせ、それから規矩をひろげ、精度を厳密にし、先後本末の順序にしたがつて、ここ經史閣にある蔵書をおおいに玩味したならば、天下の理は必ずみずみまで尽くすことができ、一によつて貫くことができるだろうし、将来これを何事に施したとしても、また根本があつて窮まりないであろう。

朱子記稽古閣有曰、人之有是身也、則必有是心。有是心也、則必有是理。若仁義禮智之爲體、惻隱羞惡恭敬是

非之爲用、則人皆有之、非由外鑠我也。然聖人之所以教、不使學者收視反聽、一以反求諸心爲事、而必曰興於詩、立於禮、成於樂⁽²⁾。又曰、博學審問慎思明辨而篤行之⁽³⁾、何哉。蓋理雖在我、而或蔽於氣稟物欲之私、則不能以自見。學雖在外、然皆所以講乎此理之實。及其浹洽貫通而自得之、則又初無內外精粗之間也。世變俗衰、士不知學、挾冊讀書者、既不過於誇多鬪靡、以爲利祿之計。其有意於爲己者、又直以爲可以取足於心、而無俟於他求也。是以墮於佛老空虛之邪見、而於義理之正、法度之詳、有不察焉。其幸而或知理之在我與夫學之不可以不講者、則又不知循序致詳、虛心一意、從容以會乎在我之本然。是以急遽淺迫、終不能浹洽而貫通也。嗚呼、是豈學之果不可爲、書之果不可讀、而古先聖賢所以垂世立教、果無益於後來也哉。道之不明、可嘆也已。

〔校異〕

異同無し。

〔注釈〕

(1) 朱子記稽古閣：『朱文公文集』卷八〇に「鄂州州学稽古閣記」として収める。

稽古閣はここでは鄂州州学にあるものを指す。『大明一統志』卷五九・武昌府・宮室に「稽古閣、在府学、宋紹熙間、鄂州教授許中応建、藏紹興石經兩朝宸翰、又取板本九經諸史百氏、列置其旁。朱文公有記。」とある。

(2) 興於詩く成於樂…『論語』泰伯8章。

(3) 博學審問く篤行之…『中庸』20章。

〔通釈〕

朱子は「稽古閣」に記を著して次のようにいう。人というのは身体があれば必ず心があり、心があれば必ず理がある。本体である仁義礼智、作用である惻隱・羞惡・恭敬・是非は、人であれば誰しも備えているものであり、外から自己を磨くものではない。それなのに聖人の教えが、学ぶ者に外を視聽することをやめさせて、ひたすら我が心に省みて求めることを事とさせるのではなく、必ず「詩に興り、礼に立ち、楽に成る」と説き、また「博学・審問・慎思・明弁・篤行せよ」と説いているのは、なぜか。思うに、理は自己にあるとはいっても、気稟や物欲の私に蔽われたりして自然にあらわすことができない。一方、学は外であるとはいっても、みなこの理の内実を講じたものである。あまねくゆきわたり貫通して自得したならば、そもそもはじめから内外精粗の隔てなどないのである。世は遷り俗は衰え、士たるものは学を知らず、書物を携え読書する者も、博学を誇って、利禄を得ようとするに過ぎない。自己の向上のために学問をする者も、ただ自己の心に充足するだけで善いとして他に求めることがない。そのため、仏老空虚の邪見に墮し、正しい義理や詳細な法制について考察しないことになる。幸いに理が自己にあることと学問を修めなければならぬことを知る者であっても、順序にしたがって詳細にしてゆき、虚心に意をひとつにし、悠然と自己のうちにある本然にかなわせていく、ということを知らない。こうしてなおざりでいい加減となり、結局はあまねくゆきわたって貫通することができない。ああ、これでは結局は学はおさめたことにならず、書は読んだことにならず、古の聖賢が教えを世に立てたことは結局後世に益をなさないであろう。道が明らかでないこと、まことに嘆かわしいことである。

朱子上疏曰、爲學之道、莫先於窮理。窮理之要、必在於讀書。讀書之法、莫貴於循序而致精。而致精之本、則又在於居敬而持志。此不易之理也。夫天下之事、莫不有理。爲君臣有君臣之理、爲父子有父子之理、爲兄弟、爲夫婦、爲朋友、以至出入起居、應事接物之際、亦莫不各有其理焉。窮之、則自君臣之大、以至事物之微、莫不知其所以然與其所當然、而亡纖芥之疑、善則從之、惡則去之、而無毫髮之累。此爲學所以莫先於窮理也。至論天下之理、則要妙精微、各有攸當、亘古亘今、不可移易。惟古之聖人爲能盡之、而其所行所言、無不可爲天下後世不易之大法。其餘、則順之者爲君子而吉、背之者爲小人而凶。吉之大者、則能保四海、而可以爲法。凶之甚者、則不能保其身、而可以爲戒。是其粲然之迹、必然之效、蓋莫不具於經訓史策之中。欲窮天下之理、而不即是以求之、則是正墻面而立耳。此窮理所以必在於讀書也。若夫讀書、則其不好之者、固忿忽間斷、而無所成矣。其好之者、又不免乎貪多而務廣、往往未啓其端、而遽已欲探其終、未究乎此、而忽已志在乎彼。是以雖復終日勤勞、不得休息、而意緒匆匆、常若有所奔走迫逐、而無從容涵泳之樂。是又安能深信自得、常久不厭、以異於彼之忿忽間斷、而無所成者哉。孔子所謂欲速則不達、孟子所謂進銳退速、正謂此也。誠能監此而有以反之、則心潛於一、久而不移、而所讀之書、文意接連、血脉通貫、自然漸漬浹洽、心與理會、而善之爲勸者深、惡之爲戒者切矣。此循序致精、所以爲讀書之法也。若夫致精之本、則在於心。而心之爲物、至虛至靈、神妙不測、常爲一身之主、以提萬事之綱、而不可有頃刻之不存者也。一不自覺、而馳騖飛揚、以徇物慾於軀殼之外、則一身無主、萬事無綱、雖其俯仰顧盼之間、蓋已不自覺其身之所在。而況能反覆聖言、參考事物、以求義理至當之歸乎。孔子所謂君子不重則不威、學則不固、孟子所謂學問之道無他、求其放心而已矣者、正謂此也。誠能嚴恭寅畏、常存此心。使其終日儼然、不爲物欲之所侵亂、則以之讀書、以之觀理、將無往而不通。以之應事、

以之接物、將無所處而不當矣。此居敬持志、所以爲讀書之本也。皆愚臣平生爲學、艱難辛苦、已試之效。竊意聖賢復生、所以教人、不過如此。蓋雖帝王之學、殆亦無以易之。

〔校異〕

a 匆匆：叢書集成本、「恩恩」に作る。 b 言：四庫全書本、「賢」に作る。

〔注釈〕

(1) 朱子上疏：『朱文公文集』卷一四に「行宮便殿奏筭」（第二筭）として収める。紹熙五年（一一九四・朱熹六五歳）に上奏。

(2) 欲速則不達：『論語』子路17章。

(3) 進銳退速：『孟子』尽心上45章。

(4) 文意接連、血脉通貫：朱熹の讀書法からすれば、「文意」は語句概念、「血脉」は文脈把握を意味する。

『大学章句』經文に「凡伝文、雜引經伝、若無統紀、然文理接統、血脉貫通、深淺始終、至為精密、熟讀詳味、久当見之、今不尽釈也」と注を附す。文献上の証拠を示す「事証」と共に文意（文理）・血脉・

事証（左驗）の三者を重視する。土田健次郎「伊藤仁斎と朱子学」（早稲田大学大学院文学研究科紀要

四二、一九九七年二月、三八頁）参照。

(5) 君子不重、学則不固：『論語』学而8章。

(6) 学問之道、放心而已矣：『孟子』告子上11章。

〔通釈〕

朱子は上疏していう。学をおさめる道は理を窮めることが最も先務であり、理を窮める要は必ず読書にある。読書の法は、順序にしたがつて精細さを極めてゆくことを最も貴び、その精細さを極めてゆく根本は、また敬に居り志を保持することにある。これは不変の理である。

およそ天下の事物には、すべて理がある。君臣であれば君臣の理があり、父子であれば父子の理があり、兄弟・夫婦・朋友から、出入・起居・事物への対応の際にいたるまで、それぞれ必ず理がある。これらの理を窮めれば、君臣の大なる関係より事物の微細な対応まで、その所以然と所当然とを知れば、わずかの疑いもなくなり、善にはしたが悪いにはとおざかれれば、わずかのわずらいも無くなるのである。これこそ、学をおさめるには、理を窮めることを先務とする理由である。

天下の理を論ずれば、言葉では表現できない奥深い妙味であるが、それぞれびたりと当てはまるところがあり、古今を通じて変わることはない。古の聖人のみはこの理を尽くし得て、その言行はすべて天下後世不変の大準則となった。そのほかは、「これに従えば君子となつて吉、これに背けば小人となつて凶である」ということになる。吉の大なる者は、天下四海を保つて法制となり、凶の甚だしい者は、その身を保つことができずに、(他者の)戒めとなった。以上が、その燦然たる足迹、必然の効験であり、やはりそれらは經典・訓詁・史書・策問のうちにすべて具わっている。天下の理を窮めようとすることにこれに即して求めないのであれば、まさに壁に向かつて立つようなものである。これこそ、窮理が必ず読書のうちにある理由である。

読書というものは、これを好まぬものは、もとより怠けおこたり中断してなにも成しえない。しかし、読書を好むものでも、また多読を貪つて博覧につとめてしまうことから免れず、しばしば端緒を解き明かしてもい

ないのに俄かに結論だけを探ろうとしたり、究めてもないうちに突如として意思はあちらにいつてしまったりする。それゆえ一日中勞して休まずに読書したとしても、さまざまな思念がせわしなく浮かび、常にあちこちに奔走して追い迫るかのようであつて、悠然として心を深く潜めるといふ楽しみはない。これでは、どうして深く信じて自得し、継続して厭わず、かの怠り中断してなにも成し得ないものと異なろうか。孔子が「速成を願う者は到達しない」と述べ、孟子が「進むことが尖鋭であれば、退くことも速い」と述べたことは、まさしくこれを言つたものである。まことにこれを鑑みて自省し、心を一に沈潜して長い間移らないように読書したならば、読んだ書物は語句・文脈がすつきりとつながり、自然にしみ込んであまねくゆきわたり、心と理とが合致して、善の勧めとなることは深く、悪の戒めとなることは切実となる。これが順序にしたがつて詳細にしてゆくことが、読書の法である理由である。

詳細にしてゆく根本というものは心にある。そして、心のありようは、最も虚靈であり、神妙にして不可測、常に一身の主宰となつて、万事の準則をたずさえ、少しも断絶しないものである。もし自覚しないままに駆け回り飛び上がつて、身体が物欲にしたがえば、一身には主宰となる心がなくなり、万事には準則がなくなり、たとえ仰ぎ俯き振り向くわずかの間であつても、やはりその身すら所在を自覚できない。まして、聖言を反芻し、事物にかんがみ、義理最善の帰すべきところを求めることなど出来ようはずがない。孔子が「君子は重厚でなければ威嚴がなくなり、学ぶところも堅固ではなくなる」と述べ、孟子が「学問の道は他でもない、放心を求めただけである」と述べたことは、まさしくこれを言つたのである。まことに蔽かて恭しく慎み畏れ、常にこの心を持続させ、この心によつて終日儼然として物欲に蹂躪されないようにしたならば、書を読み、理を

観ることは、向かうところすべて通じ、事に応じ、物に接することは、どこに居たとしても当を得るだろう。これこそ敬に居り志を持守することは、読書の根本である理由である。

以上はみな、私が日ごろ学をおさめるときに、艱難辛苦してその効果をためしたものである。謹んで思うに、聖賢が再び生まれても、人を教える方法はこれと同様であり、やはり帝王の学であつても、これを改変する必要はないであらう。

朱子答汪尚書書曰、近世言道學者、失於太高。讀書講義、率常以徑易超絶、不歷階梯爲快。而於其間曲折精微、正好玩索處、例皆忽略厭棄、以爲卑近瑣屑、不足留情。以故雖或多聞博識之士、其於天下之義理、亦不能無所未盡。曷若循下學上達之序、口講心思、躬行力究。寧煩毋略、寧下毋高、寧淺毋深、寧拙毋巧。從容潛玩、存久漸明、衆理洞然、次第無隱。然後知夫大中正之極、天理人事之全、無不在是、初無迴然超絶不可及者。而幾微之間、毫釐畢察、酬酢之際、體用渾然、雖或使之任至重而處所難、亦沛然行其所無事而已。

〔校異〕

a 例…四庫全書本、「毎」に作る。 b 口講心思…四庫全書本、「日講夜思」に作る。

〔注釈〕

(1) 朱子答汪尚書書…『朱文公文集』卷三〇に「答汪尚書書」(第三書)として収める。隆興二年(一一六四・

朱熹三十五歳)に著した書簡。

汪尚書は、汪応辰（一一一九—一七六）。字は聖錫、江西信州玉山の人。紹興五年の進士。主和議に反対し、秦檜の死後は、吏部尚書となった。『文定集』五十巻がある。

〔通釈〕

朱子「汪尚書に答えるの書」にいう。近年、道学を提唱する人々も、非常に高遠に陥ってしまったている。読書・講義は、常に素早く簡便に卓絶し、段階を踏まないことを良いとしている。しかも、その要所要所の詳細な状況や精深微妙な、まさに玩味すべき箇所については、だいたい全て疎かにして厭い棄て、それらは卑近で瑣末なことであり、意を留めるには足らないことと見做している。それゆえ、多聞博識の士であつても、天下の義理については、まだ充分に尽してはいない。どうして、身近なことより深遠な道理を学んでいくという順序に従つて、口に講じ心に思い、身に行ない務め究めないのか。むしろ煩瑣で、低く、浅く、拙かったとしても、疎略でなく、高くなく、深くなく、巧みでない方が良い。従容としてひたすら玩味し、長い間保ち続けてようやく明らかになり、様々な理がはつきりとして、順序次第も明らかになるものである。それから過不及なき至正の極みや、天理・人事の全般に、この次序があり、そもそも抜きんでて卓絶し及ばないものなど無いことが分かるのである。そうしてこそ、機微の間に、わずかなことでも全て察し、人とのやりとりの際にも、体用は渾然一体となり、そのような人であれば、かりに重要なことを任せ、難解なことを処理させたとしても、すばやくすんなり行ない得るであらう。

朱子答呂子約書曰、夫學者既學聖人、則當以聖人之教爲主。今六經語孟中庸大學之書具在。彼以了悟爲高者、既病其障礙、而以爲不可讀。此以記覽爲重者、又病其狹小、而以爲不足觀。如是、則是聖人之所以立言垂訓者、徒足以誤人、而不足以開人、孔子不賢於堯舜、而達磨賢於仲尼矣。無乃悖之甚邪。

〔校異〕

異同無し。

〔注釈〕

(1) 答呂子約書：『朱文公文集』卷四七に「答呂子約」(第二四書)として収める。

呂子約は、呂祖儉(？—一九六)。子約は字、号は大愚。浙江金華の人、呂祖謙の弟。著に『大愚集』がある。

(2) 達磨：『朱文公文集』は、「達磨史固^{△△}」に作る。「史固」は、司馬遷・班固。

〔通釈〕

朱子「呂子約に答えるの書」にいう、そもそも学ぶ者は、一旦聖人について学んだならば、聖人の教えを主とするはずである。いま、六經・論語・孟子・中庸・大学の書はそなわっている。それにもかかわらず、明かな悟りを高い教えだと思ふ彼者(仏学)は、その障碍を非難して、読むべきでないともなすし、また博覽強記を重んずる此者(儒学)は、その狭小さを非難して、観るに足らないものとみなしている。このようであれば、聖人が言を立てて教えを施したことは、ただ人を誤らせるだけで、人を導くには不十分となってしまうし、孔子は堯・舜に劣り、達磨は孔子より優れていることになってしまう。悖戾すること、なんと甚大ではなからう

か。

朱子答劉定夫書曰、學者息却許多狂妄身心、除却許多間雜說話、著實讀書。初時儘且尋行數墨⁽²⁾、久久自有見處。最怕人說學不在書、不務佔畢、不專口耳。下梢說得張皇、都無收拾、只是一場脫空、直是可惡。

〔校異〕

異同無し。

〔注釈〕

(1) 答劉定夫書：『朱文公文集』卷五五に「答劉定夫」(第一書)として収める。

劉定夫は、未詳。王佃利・白如祥 訳注『象山語録』(中国儒哲十大名著)(山東友誼出版社、二〇〇一年九月)には「劉定夫、陸九淵弟子」(二六三頁)と注釈する。

(2) 尋行數墨：おそらく、読書に際して、行を逐い文字に拘るだけで、義を悟らないこと。朱鑑『朱文公易說』卷二に「須知三絶韋編者、不是尋行數墨人」とある。

〔通釈〕

朱子「劉定夫に答えるの書」にいう、学ぶ者は、数多くの狂妄なる心身を滅し、数多くの錯雑した説話を廃して、読書に集中するものである。最初は、たとえ表層的に行文をなぞるだけであっても、長い間続けさえすれば悟るところがある。逆に最も恐れるのは、「学問は書に拠る必要はない、文字のみをうかがい見たりしない、

(師説の) 受け売りには務めない」などと他者が説くことである。(そういう輩は) 結局のところ遠大なことばかりで、全く收拾がつかず、ただその場だけのいつわりを述べるだけであつて、悪むべきものである。

朱子⁽¹⁾曰、爲學須是己分上做工夫、有本領、方不作言語說。若無存養、儘說得明、自成兩片、亦不濟事。況未必說得明乎。要須發憤忘食、痛切去做身分上工夫。莫荏苒歲月、可惜也。

〔校異〕

a 要須：叢書集成本、「須要」に作る。

〔注釈〕

(1) 朱子曰：『朱子語類』卷一一四・訓門人34条に収める。

〔通釈〕

朱子という、「学問を修めることは、自分の本分に修養を行なうことであり、本性が発揮されてこそ、はじめて言語として説くことはなくなる。もし存養がなければ、たとえ明解に説こうとも、自然と二事に分かれてしまい、成果はない。まして、明解に説き得ない者は言うまでもない。発憤し食を忘れ、深く我が身に修養を加える必要がある。歳月を無駄に過ごすことのないよう惜しまねばならない。

朱子曰、某之講學所以異於科舉之文、正是要切己行之。若只恁地說過、依舊不濟事。若實是把做工夫、只是敬以直内、義以方外八字、一生用之不盡。

又曰、某近覺得學者所以不成箇頭項者、只緣聖賢說得多了、既欲爲此、又欲爲彼。如說敬以直内、義以方外、若實下工夫、見得真箇是敬立則内直、義形而外方、這終身可以及用。今人却似見得這兩句好、又見說克己復禮也好、又見說出門如賓也好。空多了少間却不把握得一項周全。「李貫之曰、敬能集義、義不離敬。敬不容不義、義不容不敬。敬義夾持、則心常存。心存則心熟而智益明。敬義二字、該盡六經語孟中所言之理。」

〔校異〕

a 及：叢書集成本・四庫全書本、「受」に作る。 b 少間：四庫全書本、「流戀」に作る。

〔注釈〕

(1) 朱子曰：『朱子語類』卷六九・易・坤46条に収める。

(2) 敬以直内、義以方外：『易』坤・文言「直其正也、方其義也。君子敬以直内、義以方外」。

(3) 又曰：『朱子語類』卷一二一・訓門人8条に収める。

(4) 克己復礼：『論語』顔淵1章。

(5) 出門如賓：『春秋左氏伝』僖公伝三十二年。

なお、『朱子語類』は「出門如見大賓」に作る。「出門如見大賓」の出典は、『論語』顔淵2章。

(6) 李貫之：李道伝（一一七〇—一二二七）。貫之は字。四川隆州井研の人。伝は『宋史』卷四三六。

〔通釈〕

朱子はいう、私の講学が、科擧の文と異なるところは、自分自身に切実に修養を行なうことを要めることである。もしこのように説いていくだけであれば、旧説に依るだけで成果はないが、実際に修養を行なうければ、ただこの「敬によつて内を直くし、義によつて外を方にする」という八字は、一生涯務めても尽くしきれないものである。

またいう、最近、学ぶ者が成果を得ないのは、ただ聖賢が多く説いたことに因り、こちらもあちらも行なうと思つてしまうことだと分かつた。「敬によつて内を直くし、義によつて外を方にする」と説くことについては、もし着実に修養を行ない、真に敬が立つて内が直くなり、義が現れて外が方になることを悟れば、終身用いられるであろう。今人はこの二句がよいと判つていながら、また「己に克ちて礼に復る」の句も良いし、「門を出づること賁の如し」の句も良いなどと言う。それではほとんどは空しくおわるだけで、却つて一つも完全には捉えることもできない。「李貫之はいう、敬は義を集め、義は敬から離れない。敬は義でないものを容れず、義は敬でないものを容れない。敬・義ともに持守すれば、心は常に存す。そうなれば、心は熟して智はますます明らかになる。敬・義の二字は、六経・論語・孟子・中庸の述べる理を兼ね備えたものである。」

朱子論孟集義序曰、論孟之書、學者所以求道之至要。古今爲之說者、蓋已百有餘家。然自秦漢以來、儒者類皆不足以與聞斯道之傳。其溺於卑近者、既得其言而不得其意。其騫於高遠者、則又支離踳駁、或乃并其言而失之。

學者益以病焉。宋興百年、河洛之間、有二程先生者出、然後斯道之傳有繼。其於孔子孟氏之心、蓋異世而同符也。故其所以發明二書之說、言雖近而索之無窮、指雖遠而操之有要。使夫讀者、非徒可以得其言、而又可以得其意、非徒可以得其意、而又可以并其所以進於此者而得之。其所以興起斯文、開悟後學、可謂至矣。間嘗蒐輯條流以附於本章之次。既又取夫學之有同於先生者、與其有得於先生者、若橫渠張公、若范氏〔名祖禹、字淳夫。〕、二呂氏〔希哲、字原明。大臨、字與叔。〕、謝氏〔良佐、字顯道。〕、游氏〔酢、字定夫。〕、楊氏〔時、字中立。〕、侯氏〔仲良、字師聖。〕、尹氏〔焯、字彥明。〕、凡九家之說、以附益之。名曰論孟精義、以備觀省、而同志之士有欲從事於此者、亦不隱焉。抑嘗論之。論語之書、無所不包、而其所以示人者、莫非操存涵養之要。七篇之指、無所不究、而其所以示人者、類皆體驗充擴之端。夫聖賢之分、其不同固如此。然而體用一源也、顯微無間也。是則非夫先生之學之至、其孰能知之。嗚呼、茲其所以奮乎百世絕學之後、而獨得夫千載不傳之傳也。若張公之於先生〔如橫渠之於二程。〕、論其所至、竊意其猶伯夷伊尹之於孔子。而一時及門之士、考其言行、則又未知其孰可以爲孔氏之顏曾。今錄其言、非敢以爲無少異於先生、而悉合乎聖賢之意。亦曰、大者既同、則其淺深疎密、毫釐之間、正學者所宜盡心耳。至於近歲以來、學於先生之門人者、又或出其書焉、則意其源遠未分、醇醜異味、而不敢載矣。或曰、凡說之行於世、而不列於此者、皆無取已乎。曰不然也。漢魏諸儒、正音讀、通訓詁、考制度、辨名物、其功博矣。學者苟不先涉其流、則亦何以用力於此。而近世一二名家與夫所謂學於先生之門人者、其攷證推說、亦或時有補於文義之間。學者有得於此而後觀焉、則亦何適而無得哉。特所以求夫聖賢之意者、則在此而不在彼爾。若夫外自託於程氏、而竊其近似之言以文其異端之說者、則誠不可以入於學者之心。然以其荒幻浮誇、足以欺世也、而流俗頗已歸鄉之矣。其爲害豈淺淺哉。顧其語言氣象之間、則實有不難辨

者。學者誠用力於此書、而有得焉、則於其言雖欲讀之、亦且有所不暇矣。然則是書之作、其率爾之謂、雖不敢辭、至於明聖傳之統、采衆說之長、折流俗之謬、則竊亦妄意其庶幾焉。

〔校異〕

a 淳夫：叢書集成本、「涇甫」に作る。 b 淺淺：叢書集成本、「淺鮮[△]」に作る。

〔注釈〕

(1) 論孟集義序：『朱文公文集』卷七五に「語孟集義序」として収める。

『論孟集義』は、朱熹が二程子・張載等十二家の『論語』『孟子』に対する解釈を輯めて編纂した書。初め『論孟精義』としたが、後に『論孟要義』に改名し、さらに『論孟集義』へと改名した。

(2) 横渠張公：張載（一〇二〇—一〇七七）。字は子厚。陝西郿県横渠鎮の人で、代々「横渠先生」と呼ばれる。著に『正蒙』『易說』等がある。

(3) 范氏：范祖禹（一〇四一—一〇九八）。四川成都華陽の人で、「華陽先生」と呼ばれる。字は淳夫、また夢得。司馬光に従って『資治通鑑』を編修する。

(4) 二呂氏：呂希哲と呂大臨のこと。呂希哲（一〇三九—一一一六）は、字は原明。安徽寿州の人。胡瑗等に学び、程顥・程頤・張載等と交流。呂大臨（一〇四〇—一〇九二）は、字は与叔。陝西藍田の人。張載に学び、程頤に従遊。謝良佐・游酢・楊時と共に程門の四先生と言われる。

(5) 謝氏：謝良佐（一〇五〇—一一〇三）。字は頌道。河南上蔡の人で、「上蔡先生」と呼ばれる。著に『論語說』『上蔡語錄』がある。

(6) 游氏：游酢（一〇五三—一一二二）。字は定夫。福建建陽の人。著に『易説』『中庸義』『論語孟子雜解』等がある。

(7) 楊氏：楊時（一〇五三—一一三五）。字は中立。福建将楽の人。晩年は龜山に隠居し、「龜山先生」と呼ばれた。著に『龜山集』がある。

(8) 侯氏：侯仲良。字は師聖。山西河東の人。周敦頤・程頤に学び、胡安国と交流。著に『論語説』等がある。

(9) 尹氏：尹焞（一〇七一—一一四二）。字は彦明、また徳充。河南洛陽の人。程頤に師事する。靖康の始め、「和靖处士」の号を賜る。

(10) 体用一源也、頭微無間也…程頤『易伝』序。
〔通釈〕

朱子「論孟集義序」につきのようにいう。『論語』『孟子』の書は、学をおさめるものが道を求めるための至上の要書である。古今これについて説をなす者は、すでに百家にあまる。だが、秦漢以来、ほとんどの儒者は斯道の伝を預かり聞くには不十分であった。卑近に泥むものは、その言辞を得てはいてもその意を得ていないし、高遠に馳せるものは、滅裂混乱して、あるいはその言辞すら共に失ってしまったていて、学ぶ者はますます害としていた。宋が興つてより百年、黄河・洛水一帯に二程先生が現れて、はじめて斯道の伝は継がれた。（二程先生は、）孔子・孟子の心について、やはり世を異にしてはいるが符節は合するものがある。ゆえに二程先生が『論語』『孟子』二書を解明した説は、言葉は卑近であるとはいっても求めれば窮まりなく、旨は高遠である

とはいっても行えば要を得ている。読む者はその言辞を得ることができただけでなく、さらにその意をも得ることができ、その意を得ることができただけでなく、さらに斯学に進む方法をもあわせて得ることができである。その斯文を興起させ、後学を開悟すること、この上ないとわかるだろう。

近頃ころみに二程先生の説を集めて本文各章の後ろに附した。それに加えて、学に先生と同じところのある者と先生より理解することがあつた者——例えば張横渠や、范祖禹「字は淳夫」、呂希哲「字は原明」、呂大臨「字は与叔」、謝良佐「字は顕道」、游酢「字は定夫」、楊時「字は中立」、侯仲良「字は師聖」、尹焞「字は彦明」といった、あわせて九家の説を採用し、これにつけ加えた。『論孟精義』と名付け、『論語』『孟子』二書を閲覽する際の助けとなるようにし、同志の士で従事しようとする者にはつきり判るようにした。

試しにこのことについて論じてみよう。『論語』の書はあらゆることを内包しているが、人に示すことは操存・涵養の要点だけである。『孟子』七篇の旨はあらゆることを追求しているが、人に示すことはすべて体験・拡充の端緒だけである。そもそも聖賢の分が異なること、もとよりこのようである。しかしながら、「体用は一源であり、顕微に隔てはない」という。これは二程先生の至上の学でなければ、誰が知ることができよう。ああ、これこそが、百世絶学の後に奮い、ただ一人千載不伝の伝を得た理由なのだ。張公を先生に比肩することは「張横渠の二程先生に対することについては」、その到達点より論ずれば、伯夷・伊尹と孔子を比べるようなものである。二程先生に一時入門した士の言行を考えてみても、孔子における顔子・曾子が誰であるか分らない。今、張載等の言を採録することは、二程先生と異なることが少しもなく、聖賢の意に悉く合しているとは決して思わない。ただ言えることは、大なるところが同じであれば、あとはその浅深・疎密や微細なる違

いについて、学ぶ者は心を尽くして欲しいということである。近年以来、二程先生の門人に学んだ者が、書を著すこともあるが、それらについては、源泉が遠くなつて末流は分かれ、濃い・薄いという味の違があることをかんがみて、載録しなかつた。

あるいは、世に流布していながらここに列せられていない説は、みなみるべきところがないのか、と言われるかもしれない。しかし、そうではないのである。漢魏の諸儒は、音読を正し、訓詁を通じ合わせ、制度を考証し、名前を明らかにした。その功績は大きい。学ぶ者はまずその学流をふまえなければ、どうして労力を本書に用いることができようか。近世の一、二の名家やいわゆる二程先生の門人に学んだ者であれば、考証・推察はやはり時には文義を考える上で助けとなることがある。学ぶ者がここに得ることあつてから観るのであれば、いずれであつても得るところがある。ただかの聖賢の意を求めるとは、此こゝにあつて彼かしこにないだけである。外面は程氏に託していながら、都合の良い似た説を盗み用いて異端の説を飾る者などは、まことに学ぶ者の心に入れてはならないのである。しかしその誇大妄想よりは世を欺くに十分であつて、俗世の風潮はすでに多くこれになびいてしまつてゐる。その害はどうして浅いといえようか。その言葉や雰囲気についてみれば、実に弁別し難いものはない。学ぶ者が労力を本書に用いて会得することがあつたならば、こうした異端言説について、読もうとしても、そんな暇はないのである。

そうであれば、本書を作成したことは、軽率とのそしりは決して辞さないとしても、聖伝の道統を明かにし、諸説の優れたものを採録し、流俗の誤謬を指弾したことは、やはり意義あることだと思考する次第である。

朱子作論語訓蒙〔後更名集注。〕序曰、余既序次論語精義以備觀覽。暇日又爲兒輩論之。大抵諸老先生之爲說、非本爲童子設也、故其訓詁略而義理詳。初學者讀之、經之文句、未能自通。又當徧求講說、問其指意、茫然迷眩、殆非啓蒙之要。因爲刪錄以成此書。本之註疏以通其訓詁、參之釋文以正其音讀、然後會之於諸先生之說以發其精微。一句之義、繫之本句之下、一章之旨、列之本章之左、以平生所聞於師友而得於心思者、間附一二條焉。本末精粗、大小詳略、無敢偏廢也。然本其所以作取便於童子之習而已、故名曰集注詳說。蓋將藏之家塾、俾兒輩學。非敢爲他人發也。嗚呼、小子來前。予幼獲父師之訓、從事於此、三十餘年、材資不敏、未能有得。今乃妄意採摭先儒有所取舍、度德量力、夫豈所宜。然施之汝曹、取其易曉、以是庶幾其可幸無罪焉耳。夫其訓詁之詳且明也、日講焉則無不通矣。義理之精且約也、日誦焉則無不識矣。通者已知而時習、識者未解而勿忘。予之始學、亦若斯而已矣。嗚呼、小子其懋戒之哉。汲汲焉而母欲速也。循循焉而母敢惰也。母牽於俗學而絕之以爲迂且淡也。母惑於異端而獵之以爲近且卑也。聖人之書、大中正之極、而萬世之標準也。古之學者、其始即此以爲學、其卒非離此以爲道、窮理盡性修身齊家推以及人、內外一致。蓋取諸此而無所不備、亦修吾身而已矣。舍而他求、夫豈無可觀者。然致遠恐泥、昔者吾幾陷焉、今裁自脫、故不願汝曹之爲之也。嗚呼、小子其懋敬之。

〔校異〕

a 小子…四庫全書本、「小子」の上に「其」字有り。 b 戒之…叢書集成本、「敬之」に作る。 c 標準…叢書集成本、「準標」に作る。 d 今裁…四庫全書本、「今幸」に作る。 e 懋敬之…叢書集成本、「懋戒之哉」に作る。

る。

〔注釈〕

(一) 論語訓蒙序：『朱文公文集』卷七五に、「論語訓蒙口義序」として収める。

〔通釈〕

朱子『論語訓蒙』「後、「集注」と改名した」の序文にいう、私は、『論語精義』を整理して、閲覧に便利なようにしたが、暇日また子供たちのために論じた。

たいてい、諸先生方の説は、もとより子供たちのために設けられたものではない。だからその訓詁は簡略であつて、義理は詳かである。初学者が読んでも、經書の文句はすつきりと理解できない。また、当然あまねく誦説を求め、その指意を問うのであるが、茫然として迷妄に陥るばかりであつて、ほとんど啓蒙の枢要にはならない。このようなわけで刪録して本書を著したのである。注疏に本づいて訓詁に通じ、『經典釈文』を參觀して音読を正し、その後に諸先生の説を參觀して、その精微を明かにした。一句の意味は本句の後に附し、一章の旨は本章の後に列ねて、平素、師友から聞き心思に得たことを、その中に一、二条附しておいた。本末精粗・大小詳略は、偏廢しなかつた。だから、本よりその作成理由は、利便さを童子の学習に求めただけであるから、『集註詳説』と名付けたのである。やはり本書は、家塾におさめて、子供たちに学ばせようとしたのであつて、決して他の人のために明らかにしたわけではない。

ああ、お前達よ、来なさい。私は幼い頃、父や師の教えを受けて、斯学に三十年余り従事したが、才覚が不敏であるため、いまだ体得するには至つていない。今、むやみに先儒をとり挙げて、取捨し、徳・力をはかる

ことは、全くふさわしくないことである。しかしながら、お前達に施すのに際し、理解しやすいものを採用したのであり、幸いにして罪がないことを願うだけである。訓誥は詳細かつ明快であり、毎日講学すれば、通じないことはなくなる。義理は精密かつ簡約であり、毎日誦経すれば、識らないことはなくなる。通じるとは、知った後にも時として習うことであり、識るとは未だ理解していないが、忘れることがないことである。私が初めて学んだ時は、このようであった。

ああ、お前達よ、努め戒めよ。汲々として素早く達成しようとは思うな。循々として決して怠惰になるな。俗学にひかれて聖学を止め、迂遠で浅薄なものと誤解するな。異端の学に惑って聖学を漁り求めて、手軽で低俗なものと誤解するな。聖人の書は、大中至正の極みであり、万世の標準である。古の学ぶ者は、最初からこ（聖人の書）に即して学とみなし、世を終えるまでこれを離れて道とみなすことはなく、理を窮め性を尽くし、身を修め家を斉えて、人に推し及ぼして、内外一致させていく。やはりこれを聖学に取れば備わらないことは何もなく、ただ吾が身を修めるだけである。逆に聖学を棄てて他に求めても、おそらく見るべき成果はないだろう。高遠に馳せ、低俗に泥むことを恐れるという弊害に、以前は私もほとんど陥っていたが、今やつと自から脱したのである。だからお前達が私のような失敗をすることを願わないだけである。ああ、お前達よ、努め慎め。

朱子⁽¹⁾曰、主敬致知、摧驕破吝、謹之於細微雜亂之域、而養之於虛間靜一之中。

右朱子送門人李伯諫教授蘄學之訓。上文云、與伯諫游、而講於斯也、亦三年矣。凡持守之要、玩索之端、巨細精粗、蓋已無所不論。今使之言、其又何以加此。然有一焉「云云」⁽³⁾。是則雖屢言之、而豈患乎瀆哉。

〔校異〕

a 「右朱子送門人」より「而豈患乎瀆哉」に至るまで、叢書集成本・四庫全書本は割注扱い。

〔注釈〕

(1) 朱子曰：『朱文公文集』卷七五に「送李伯諫序」として収める。

(2) 李伯諫：李宗思。字は伯諫。福建建州建安の人。朱熹の門人。

(3) 云云：本句「主敬致知、摧驕破吝、謹之於細微雜亂之域、而養之於虛間靜一之中」が省略。

〔通釈〕

朱子はいふ、敬を主とし知を致し、驕を摧き吝を廢し、細微雜亂の域に謹み、虚間靜一の中に養う。

右は門人李伯諫が蘄州學に教授として就任するのの際し、朱子が見送つた時の訓えである。前文には以下のように言う。李伯諫と同行して、斯學を講ずること三年。すべて持守の枢要・玩味すべき端緒は、大小精粗、論じないことは無かつた。いまたとえ言及したとしても、何も加えることはない。しかしもし一つだけ挙げるとすれば、「云々」である。これは何度も述べたとはいつても、どうしてくどさを憂えたりするだろうか。

朱子曰用自警詩云、圓融無際大無餘、即此身心是太虛。不向用時勤猛省、却於何處味眞腴。尋常應對尤須謹、造次施爲莫放疎。一日洞然無別體、方知不枉費工夫。

〔校異〕

異同無し。

〔注釈〕

(1) 朱子曰用自警詩：『朱文公文集』卷六に「日用自警示平父」として収める。郭齊箋注『朱熹詩詞編年箋注』（巴蜀書社、二〇〇〇年四月、六二六頁）は、本詩が『大同集』に収載されていることから、おむね紹興二三年（一一五三）から二七年（一一五七）の間に朱熹が同安県で讀んだ詩と推測する。

〔通釈〕

朱子は日常における自戒の詩にこう詠んでいる。遍く行き渡って際限なく、大にして余すところが無い。つまりはこの心身こそが太虚なのだ。用いる時において直ちに反求に勤めないのであれば、いったいどこでその真髓を味わうのか。日常での外物への応対こそ、最も謹む必要がある。咄嗟の場合の行為についても疎かにしてはいけない。ある日一体であることがはつきりすれば、殊更に工夫を浪費するのではないことを初めて知るのだ。

先師果齋史先生（一）。毎教學者、必首以此篇使之揭于座右曰、學問進修之大端、其略有四。一曰尚志。二曰居敬。

三曰窮理。四曰反身。大抵爲士莫先於尚志。孔子曰、吾十有五而志于學、孟子曰、士何事、曰尚志、仁義而已矣。⁽³⁾程子亦曰、言學、便當以道爲志。言人、便當以聖爲志。⁽⁴⁾苟此志不立、而惟流俗之徇、利欲之趨、則終身墮於卑陋、而不足與詣高明光大之域矣。何足以爲士哉。此志既立便當居敬以涵養其本原。蓋人心虛靈、天理具足、仁義禮智、皆吾固有、聖賢之所以爲聖賢者、非自外而得之也。苟能端莊靜一以涵養之、則志氣清明、義理昭著、而人欲自然退聽。以此窮理、理必明、以此反身、身必誠。乃學問之本原也。夫既知涵養其本原、則天理之全體、固渾然於吾心矣。然一心之中、雖曰萬理咸具、天叙天秩、品節粲然、苟非稽之聖賢、講之師友、察之事物、驗之身心、以究析其精微之極至、則知有所蔽、而行必有所差。此大學之誠意正心修身、所以必先格物致知、中庸之篤行、所以必先博學審問慎思明辨也。⁽⁵⁾既知所以窮理矣、則必以其所窮之理、反之於身、以踐其實。日用之間、微而念慮、著而云爲、其當然者、皆天理之公、其不當然者、皆人欲之私也。於此謹而察之。果當然乎、則充之唯恐其不廣、行之唯恐其不至、果不當然乎、則改之唯恐其不速、去之唯恐其不盡。從事於斯、無少間斷、則人欲日以消泯、天理日以純熟、而聖賢之道忽不自知其實有於我矣。窮則獨善其身、可以繼往聖而開來學、達則兼善天下、可以參天地而贊化育。其功用有不可勝窮者。若夫趨向卑陋、而此志不立、持養疎略、而此心不存、講學之功不加、而所知者昏蔽、反身之誠不篤、而所行者悖戾。將見人欲愈熾、天理愈微、本心一亡、亦將何所不至哉。書曰、惟聖罔念作狂、惟狂克念作聖。聖狂之分、特在念不念之間而已矣。併惟同志勉之。〔此本雙峯饒氏之訓。〕

果齋先生〔名蒙卿、字景正、鄞人。〕、早師常德小陽先生〔名岳、號字溪。〕、大陽先生〔名枋、號存齋。〕、陽先生師涪陵晏先生〔名淵、字亞夫。〕晏先生師朱子。

程氏家塾讀書分年日程綱領

〔校異〕

a 孟子曰士何事曰：叢書集成本、「孟子答王子墊曰」に作る。

〔注釈〕

(1) 果齋史先生：史蒙卿（一一二四七—一三〇六）、字は景正、果齋は号。またの号は靜清処士。浙江鄞県の人。咸淳元年の進士。家学は陸学であつたが、彼は朱子学に改宗。以後、子弟は程朱学を奉じた。著に『靜清集』がある。

(2) 吾十有五而志于学：『論語』為政4章。

(3) 士何事、曰尚志、仁義而已矣：『孟子』尽心上33章。

(4) 言学、便当以道為志。言人、便当以聖為志：『程氏遺書』卷一八32章。

(5) 大学之誠意正心修身、所以必先格物致知：『大学章句』経「古之欲明明徳於天下者、先治其国。欲治其国者、先齐其家。欲齐其家者、先修其身。欲修其身者、先正其心。欲正其心者、先誠其意。欲誠其意者、先致其知。致知在格物」。

(6) 中庸之篤行所以必先博学審問慎思明弁：『中庸章句』20章「博学之、審問之、慎思之、明弁之、篤行之」。

(7) 書曰、惟聖罔念作狂、惟狂克念作聖：『尚書』多方。

(8) 此本双峯饒氏之訓：饒双峯は饒魯。字は伯輿、江西饒州余干の人。双峯は号。黄榦に従学した。「饒魯の

訓え」の具体的な内容は、未詳。

(9) 小陽先生：陽岳。号は存齋。四川銅梁の人。小陽先生と称される。著に『易説』がある。なお『分年日程』ではいずれのテキストも、陽岳の号を字溪、陽枋の号を存齋としている。

(10) 大陽先生：陽枋（一一八七—一二六七）、四川巴川の人。号は字溪。大陽先生と称される。著に『易説』、『字溪集』がある。

(11) 涪陵晏先生：晏淵、字は亜夫、号は蓮塘。四川涪陵の人。朱熹に師事する。著に『孟子注』がある。
〔通釈〕

先師 史果齋先生は、学ぶ者に教える際、いつもまずこの一篇を座右に掲げさせた。それは、「学問を修め進める重要な端緒は、大まかに言つて四つある。一つ目を尚志と言ひ、二つ目を居敬と言ひ、三つ目を窮理と言ひ、四つ目を反身と言ふ」という。おおむね士たる者は、志を高くもつことを最も先務とする。孔子は「私は十五歳で学に志した」と言ひ、孟子は「士は何をするべきか。尚志であり、仁義である」と言ひ、程子もまた「学問について言えば、当然道をこそ志としなければならぬし、人について言えば、聖をこそ志としなければならぬ」と言つている。仮にもこの志を立てず、ただ流俗にしたがひ、利欲に走つてしまつたならば、終には身は卑陋に墮落し、共に高明・光大の域に達するには不十分となつてしまふ。どうして士たるに足ろうか。この志が立つたならば、当然敬に居ることその本原を涵養していく。やはり人の心は靈妙であり、天理が具わつている。仁義礼智は、みな人の固有するものである。聖賢が聖賢であるのは、己れの外から得たものではない。仮にも蔽かに静一にしてこれを涵養することが出来れば、志気は清明に、義理は昭らかなり、人欲

は自ずと減退していくだろう。これによって理を窮めれば理は必ず明らかとなり、これによって我が身に省みれば身は必ず誠となる。これこそ学問の本原なのである。

この本原を涵養することを知ったならば、天理の全体は実にその心の中に渾然と具わる。しかし、その心の中にはあらゆる理が全て具わり、天の秩序をうけ、品節は燦然と輝くとは言っても、もしもそれを聖賢に照らし合わせ、師友に講じ、事物に察し、心身に現して、その精微の極地を究めることをしなれば、知は(氣に)蔽われ、行は(道に)違ってしまうだろう。これが、『大学』の誠意・正心・修身が必ず格物・致知を先とし、『中庸』の篤行が必ず博学・審問・慎思・明弁より前に位置づけられている理由なのである。

理を窮める手だてを知ったならば、必ずその究めた理によって自らの身に反求し、実践する。日常において微細なものには思慮、顕著なことには言動、それらのあるべきものは、みな天理の公であり、そうあるべきでないものはみな人欲の私である。謹んでこれを察すべきである。かくあるべきときは、その拡充が十分でないこと、行いが至らないことだけをただ恐れ、逆にかくあるべきでないときには、その改善が遅れること、これを完全に克服できていないことをただ恐れる。以上のことに従事し、少しも途絶えさせなければ、人欲は日に消滅し、天理は日に日に純熟し、聖賢の道は忽ち知らぬ間に自らの内にあることになるであろう。

困窮した時は、独り自身をおさめて善くしていき、往時の聖人を継いで後世の学者を開悟することが出来る。栄達した時は、自身も天下も併せて善くしていき、天地にまじわってその化育を贊助することが出来る。そのはたらきは窮まり尽きることがない。卑陋に向かえばこの志は立たず、存養が粗略であれば、この心は存し得ず、講学の工夫を充分に加えなければ、知識は昏く蔽われ、身に反求する誠が希薄であれば、行いは道に悖る。

人欲はいよいよ盛んに、天理はいよいよ喪われるのを観るであらうし、本心は亡んで、何処へ向かっていくことになってしまふのであろうか。『尚書』に「聖であつてもよく考えなければ狂となり、狂であつてもよく考えれば聖となる」とある。聖と狂との違いは思慮するかしないかだけである。並びに思う、同志がこれを勉めんことを。「これはもともと饒双峰氏の訓えである。」

果齋先生「名は蒙卿、字は景正、鄞の人。」は、若い日に常徳の小陽先生「名は岳、号は字溪。」、大陽先生「名は枋、号は存齋。」に師事した。陽先生は涪陵の晏先生「名は淵、字は亞夫。」に師事し、晏先生は朱子に師事した。

以上、『程氏家塾読書分年日程』綱領。